



エサをあげないで

ニホンザルの被害が深刻化しています

ニホンザルが、人家や畑を荒らす被害が発生しています。人からエサをもらうなどして人間への警戒心が薄らいだサルが、人家に入り室内を荒らす、人を威嚇したり襲ったりする、畑の作物を食い荒らすといった被害を起こしています。

被害の甚大な地域では、爆竹や花火などを使いサルを追い払ったり、捕獲したり、電気柵で農地を囲ったりと、被害を減らすため莫大な労力をかけています。根気よくサルを怖がらせて追い払う工夫を重ね、「人里に来るな」という警告を送り続けてやるのが、被害を防ぐためには必要です。

県では、サルと人とのあつれきを軽減・解消し、共存を図るため、科学的根拠に基づく計画(特定鳥獣保護管理計画)を策定し、計画的に保護管理を実施していきます。

サルに出会ったら

群れを離れたサルが、市街地に出没することがあります。このようなサルを見かけたら、危険を避けるため、次のことに注意して下さい。

- ①絶対にエサを与えない、エサを見せない。
生ゴミを放置することも、エサを与えることと同じです。
- ②そっとしておく。
近づかない・目を見ない・騒がない・子ザルをいじめない。
- ③威嚇されても、あわてず、静かに後ずさり。

大根を食べるサル



ニホンザルは日本固有の野生動物です。尾は短く、体長は60～70センチくらいです。昼間活動し、植物の葉、茎、果実、花や冬芽などをエサにしています。数十頭くらいの「群れ」で行動します。メスは群れを離れませんが、オスは5歳くらいから群れを離れて、広く動き回り(ハナレザルといひます)、市街地に出没するケースもあります。

また、観光客がサルに美味しいエサを与え、味をしめたサルがエサを求めて人に“乱暴”するなどの問題を起こしています。問題を起こしているサルでも、地域によっては頭数が少なく、地域的に絶滅の恐れもある場合があります。



ペットを捨てないで！

アライグマはペットに向かない動物です

アライグマが人家の屋根裏などにすみつき、フンをしたり、家屋を壊したり、庭の池の鯉や畑の野菜を食べたり、といった被害が増えています。

アライグマは、もともとペットとして飼われていたもので、無責任な飼い主が野山に放したり、逃げ出したりして、野生化したものです。

繁殖力が旺盛なため、数が増え、鎌倉市では平成11年から12年にかけて、被害相談件数が3倍にも急増しました。

危険な感染症

アライグマは、人間に感染すると重い症状を起こす感染症にかかっていることがあります。失明し、最悪の場合は死亡する場合もあります。

かわいいからとエサをあげたり、必要な検査をせずに安易な気持ちでアライグマを飼育したりすると、感染することもあります。



アライグマは、北アメリカに棲息する野生動物で、ペットとして輸入されたものです。日本の野生動物ではありません。

成長すると、頭から尾までの長さが1m以上にもなり、力が強く気も荒くなります。

鋭いツメを持った前足は器用で、飼育檻を開けたり、壊したりし、抜けだして部屋中を破壊することもあります。発達した犬歯で人を噛み、大けがをさせることもあります。

特に発情期は凶暴になるため、ペットとしての飼育は非常に困難です。



カラスをそんなにこわがらないで

子育て中のカラスは過敏です

カラスは、5月から7月頃卵を産み、子育てをします。この時期に、巣の近くを人が通ると、ヒナを守るうとして威嚇します。姿や鳴き声で怖く見えますが、実際に「つつく」などの攻撃をすることはまれで、静かにしていれば大丈夫です。

また、この時期にはヒナが飛ぶための訓練をしています。まだ上手に飛べず地面に降りて休んでいることがありますが、親鳥が近くで見守っていますので、手をふれずにそっとしておいてください。



カラスとゴミ

カラスが増えた原因のひとつに、エサとなるゴミが増えたことがあげられます。増えたカラスがゴミを散乱するなどの被害を起こしています。



- ゴミの散乱を防ぎ、カラスの増加を抑えるために、地域で一体となった対策が必要です。
- ①ゴミにネットをかけるなど、ゴミの出し方のルールを守りましょう。
 - ②公園などで、カラスにエサをやるのをやめましょう。



「生物多様性*」への影響

自然の生態系は、すみかである森や野原などの自然環境と、そこから生みだされるエサなど、たくさんの種類の生き物が微妙なバランスのもとで分かち合い、保ち合い成り立っています。この自然の生態系に、開発や過剰な捕獲、餌付けなどといった人間活動の影響が加えられると、このバランスが崩れてしまいます。そのため、ある種類の生き物が絶滅したり、逆に異常に増加したり、といったことが起こります。

外国から持ち込まれたアライグマやブラックバスのような生き物が日本で繁殖することも同様です。似たようなエサを食べ、似たような環境に暮らしている日本の野生生物が、すみかやエサを奪われたり、直接襲われたり食べられたり、といった生態系への影響があることを科学者たちが指摘しています。

外国から持ち込まれた生き物に罪はありませんが、生態系を守るために、やむを得ず捕獲しなくてはならないことがあります。

人間が、さまざまな形で自然の生態系に影響を与えている今日、多様な自然環境を維持していくためには、人間の手で生き物同士のバランスを調整してあげることも時には必要なのです。

*生物多様性
地球上の生物は、約40億年におよぶ進化の過程で多様に分化し、生息場所に応じた相互の関係を築きながら、生活しています。この生物の多様さとその生息環境の多様さを「生物多様性」といいます。生態系のバランスを維持するうえで重要であるばかりでなく、私たち人間の生活にも計り知れない恵みをもたらしてくれます。日本は1993年、「生物の多様性に関する条約」を批准しました。